

博士學位論文審査要旨

2018年2月1日

論文題目： 戦後、京都の繊維産業における在日朝鮮人の労働
- 西陣織と京友禅を中心に -

学位申請者： 安田 昌史

審査委員：

主査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	太田 修
副査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	富山 一郎
副査：	グローバル・スタディーズ研究科	客員助教	鄭 柚鎮
副査：	社会学研究科	教授	板垣 竜太
副査：	京都大学	名誉教授	水野 直樹

要 旨：

安田昌史氏の博士学位請求論文は、戦後京都の繊維産業（西陣織・京友禅産業）に従事した在日朝鮮人の労働を歴史学的かつ社会的に解明したものである。これまでの在日朝鮮人の労働に関する研究においては、在日朝鮮人が日本の「伝統」産業とされる西陣織・京友禅産業に就労したことが特徴的だとされており、おもに戦前の状況が取り上げられてきた。本論文は、戦後の在日朝鮮人の労働を扱った最初の本格的な研究である。その構成と各章の概要は次のとおりである。

序章では、西陣織・京友禅産業における在日朝鮮人の労働に関する先行研究および本論文の研究方法が提示されている。安田氏は、多くの在日朝鮮人が西陣織・京友禅産業で就労していたにもかかわらず、これらの産業が着物を生産する日本の「伝統」産業とされたため、在日朝鮮人が「見えない人々」として処遇されてきた点に着目し、先行研究が戦後京都の繊維産業に携わった在日朝鮮人経営者の分析に集中していることから、労働者として就労した在日朝鮮人にも注目すべきだとする。とりわけ「伝統」産業としての西陣織・京友禅産業に従事した在日朝鮮人の労働を、その就労経緯、就労形態、技術の習得過程、産業内組織、家族労働の実情、民族的アイデンティティなどの側面から検討していくことが本論文の課題として設定されている。

第1章では、戦後京都の繊維産業における在日朝鮮人の労働の背景として、高野昭雄氏らの先行研究を継承しつつ、戦前の歴史が検討されている。明治以降、西陣織、京友禅においても機械化が進められ分業体制が確立され大量生産が可能になったこと、朝鮮植民地支配の進行とともに低賃金労働力として朝鮮人が流入するようになったこと、京友禅産業においては、「きつく」「きたなく」「危険な」「蒸・水洗工程」に在日朝鮮人が多数流入し、戦後の「京都友禅蒸水洗工業協同組合」の萌芽としての「蒸組合」「水洗組合」が組織されたこと、などが明らかにされている。

第2章では、戦後京都の西陣織・京友禅産業における在日朝鮮人の労働を考えるための前提として1945年から1950年代の朝鮮人同業組合が分析されている。西陣織産業内では朝鮮人連盟で組合設立の機運が高まり1946年には朝鮮人西陣織物工業協同組合が組織されたこと、京友禅産業では1948年頃に京都蒸水洗工業協同組合が誕生したが、京友禅の分業の一工程である蒸・水洗工程では在日朝鮮人が数的マジョリティであったため業界内に別に朝鮮人組合を作る必要がなかったこと、などが論究されている。

第3章では、西陣織産業で就労した在日朝鮮人の労働について、7人の個人記録やインタビューでの語りをもとに論じられている。1960年代以降の停滞期から衰退期において、「規模の大き

い経営者」の中には、不動産業やパチンコ産業などに転業する者が存在したこと、それに対して「規模の小さい経営者」や労働者は西陣織産業に従事し続けたこと、そして全体として在日朝鮮人は「生きるため」に西陣織産業で就労したこと、などが叙述されている。

第4章と第5章では、1960年から2006年まで操業していた蒸・水洗工場Mにおける朝鮮人労働者の就労を事例として、京友禅産業における朝鮮人労働者の労働が検討されている。まず第4章では、工場Mの厚生年金台帳に記載された労働者の労働期間に着目してその労働形態が析出され、1960年代までは経営者の家族や知人などが中心になって工場を運営していたが、60年代末から70年代初めにかけて生産工程の機械化が進められ大量生産が要求されるようになると、工場の労働者が徐々に減少し始め、繁忙期の労働力不足に対応するためフレキシブルな労働力として「流れ」の労働者が登場するようになったことが明らかにされている。続く第5章では、工場Mの経営者の家族として、また同時に労働者として就労した在日朝鮮人女性のライフヒストリーを通して、在日朝鮮人女性の労働と生活について論じられている。やはり70年代の京友禅産業全体の不況によって工場経営が不安定になると、家族の女性労働者がフレキシブルな労働力、あるいは「アンペイド (unpaid)」な労働力として用いられたことが描かれている。この第4章、5章では、厚生年金台帳、密航してきた労働者、日本人労働者の役割、家族の女性労働などが分析されており、その内容に独創性が見られる。

第6章では、繊維産業で働く在日朝鮮人労働者の民族的アイデンティティが考察されている。民族的アイデンティティは、祖国、故郷の経済・社会再建に貢献したり、民族金融機関の設立に尽力したり、業界内で民族名を名乗ったり、在日朝鮮人2世としての民族的アイデンティティを再構成したり、さまざまな形で表出した。労働を通して生まれる生産品への愛着や習得する技術への自負など労働者としてのアイデンティティも同時に生じたことが論じられている。

審査においては、植民地朝鮮からの在日朝鮮人の渡日を「無計画渡日」としてよいのか、京友禅産業において蒸・水洗工程に在日朝鮮人の就労が集中していた原因は何だったのか、「見えない人々」に関連してどのような場面でなぜ「不可視」となったり「可視」となったりするのか、「伝統」産業で働く在日朝鮮人の仕事についてさらに掘り下げて論究すべきこと、「労働」の定義についてより深い検討が必要であること、「生きていく」ことと民族的アイデンティティを確信することは共存することもあるが敵対する局面もあること、在日朝鮮人女性の労働についてはさらに検討すべきこと、などの課題も提起された。しかしながら本論文は、戦後京都の繊維産業における在日朝鮮人の労働にかかわる史資料を博搜し多年にわたるインタビュー調査に基づいて執筆した最初の本格的な研究であり、歴史学と社会学が交錯する地点において、新たな問題提起を行っていることは確かである。また、定住者としての在日朝鮮人を「ともに生活する住民」という視点から考えようとしており、既存の民族や階級といった枠組みを越えた歴史性を見出す可能性を有している。よって本審査委員会は、安田昌史氏提出の学位請求論文を、博士（現代アジア研究）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると判断した。

総合試験結果の要旨

2018年2月1日

論文題目： 戦後、京都の繊維産業における在日朝鮮人の労働
- 西陣織と京友禅を中心に -

学位申請者： 安田 昌史

審査委員：

主 査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	太田 修
副 査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	富山 一郎
副 査：	グローバル・スタディーズ研究科	客員助教	鄭 柚鎮
副 査：	社会学研究科	教授	板垣 竜太
副 査：	京都大学	名誉教授	水野 直樹

要 旨：

学位申請者である安田昌史氏に対する総合試験を、2018年1月29日17時から同18時30分まで、同志社大学志高館SK116にて実施した。前半の30分は申請者のプレゼンテーション、後半60分を質疑応答にあてた。学位申請者は、本論文の問題意識、課題と方法、具体的な分析内容を、自らのフィールドワーク、インタビューの経験を交えながら各章ごとに丁寧に説明し、審査委員からの質問に対して的確かつ誠実に答え、本研究の学術的意義と今後の発展可能性について説得的に述べた。

本論文の主要部分は、査読付きの学術雑誌ですでに複数発表されており、また関連して多くの国内外での学術報告が存在する。こうした研究業績との関連についても、質問がなされ、申請者からは的確な応答があった。また、研究遂行上必要とされる韓国語および英語能力も、本論文で韓国語および英語文献を読解していることから、十分であることが確認された。よって、審査委員一同は、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 戦後、京都の繊維産業における在日朝鮮人の労働 - 西陣織と京友禅を中心に -

氏 名： 安田 昌史

要 旨：

本論文は、京都の繊維産業に就労する在日朝鮮人の「労働」に関する考察である。本論文における「労働」とは、生活するために何をしたのかということであり、研究対象には労働者だけでなく経営者も含む。

第1章では、戦前、京都の繊維産業に就労した朝鮮人を論じた。1945年以前の西陣織産業における朝鮮人に関する先行研究や各種統計をもとに考察した。先行研究より、西陣織産業では韓国併合前から染織学校で働く留学生として朝鮮人が初めて新聞記事に登場した。1920年代より西陣織産業に従事する朝鮮人は増加していく。

新聞記事の犯罪や事件に関する記事より、1910年代後半から京友禅産業において朝鮮人が登場し始める。1920年代に入り、京友禅産業で働く朝鮮人は急増していったと考えられる。また戦前の、京友禅産業に就労する朝鮮人の数は土木建築業に就く者に次いで多かった。工事期間のある土木建築業とは違い、年間通じて生産可能な京友禅産業での就労が、朝鮮人に京都への定住を促したとも考えることができる。

戦前の京都の繊維産業における朝鮮人を京都市は「低賃金労働力」として認識していた。一方、警察側では朝鮮人や彼らの組織は監視・管理の対象として、内務省警保局の資料などに登場することが多かった。1930年代、西陣織産業と京友禅産業に従事する朝鮮人の動向について、朝鮮の新聞によって朝鮮語で報道されていた。

第2章では西陣織産業と京友禅産業に誕生した在日朝鮮人の同業者組合について論じた。西陣織産業内において原料である生糸の配給権獲得を目的に、1945年直後から朝鮮人連盟を中心に朝鮮人の組合設立の機運が高まり、1946年に朝鮮人織物組合が誕生した。1950年の朝鮮戦争勃発後、朝鮮人織物組合内で思想的な対立が激化し、朝鮮人織物組合に批判的な朝鮮人業者が脱退し、彼らを中心に1950年代に相互着尺組合を結成した。朝鮮人織物組合が行った活動として、朝鮮人織物業者の窮状を京都市長へ直談判を行った。1950年代後半からは、西陣織産業の同業者組合一本化の中で朝鮮人織物組合や相互着尺組合は協力的であった。こうした協力姿勢により、朝鮮人の二組合は、業界での上部組合「西陣織工業組合」での地位を、確固なものにすることができた。

京友禅産業内では、1948年から1952年までの時期で蒸・水洗組合が誕生した。蒸・水洗組合の主要な活動は、他工程の業者や問屋との交渉、原材料の共同購入、組合加盟の工場で働く労働者の厚生年金台帳管理などであった。その中でも1950年代、新聞紙面上における象徴的な活動としては、1953年の労働者と経営者を含めたストライキを起こした。蒸・水洗工場が操業停止によって、京友禅産業の生産全体がストップしてしまうなど、業界全体に与える蒸・水洗組合の活動の影響は甚大であった。

第3章では、西陣織産業における在日朝鮮人の事例を考察した。日本への渡航の理由として、植民地朝鮮の故郷での生活の困窮化という問題を挙げる者が多かった。日本へ渡ってからどのような職業に従事するかを決めないまま、渡日した事例が中心であった。西陣織産業へ参入する際、職業の選択肢が大幅に制限されていた在日朝鮮人は生きるため、この産業に就労した。調査対象となった在日朝鮮人では、同じ朝鮮人を介して西陣織産業で就労するようになった者が多か

った。西陣織産業に関する技術の習得について、在日朝鮮人は生きるために技術を必死に獲得した。

戦前から西陣織産業で労働者として働きながら資金を蓄積し、1945 年以前より経営者として独立する事例が見られた。戦後の西陣織産業の成長期、規模の大きい経営者が、新しい製造方法を開発したり、大規模な工場を持ったりなど、経済的・社会的に「大きく成功した」という「逸話」が、見られた。零細な経営者や労働者の場合、「成功例」と考えられる記述や語りを得ることはできなかった。1960 年中盤以降、西陣織産業が斜陽へと向かう時期、経営規模の大きい在日朝鮮人経営者は、パチンコ産業などの他産業へ転業する者が存在した。しかし規模の小さい経営者や労働者の場合、筆者のインタビュー当時において、彼らは西陣織産業に従事する者や、同産業から引退後も他産業で就労することのない者であった。

第 4 章と第 5 章では京友禅産業に従事した在日朝鮮人を扱った。第 4 章では実際に 2006 年まで操業していた蒸・水洗工場 M の在日朝鮮人労働者の事例をもとに、彼らの就労形態を考察した。M には経営者家族を中心とした家族労働者と、在日朝鮮人同士の情報を通じて、M に就労するようになった者がいた。後者の中には日本の一般企業での就職が難しい在日朝鮮人や、韓国から日本に「密航」した者などが含まれる。彼らの場合、初職が M であることが多く、就労期間が比較的長期間就労する者が多かった。一方「流れ」と呼ばれる労働者たちも存在し、彼らは「職人」気質である者が多く、京友禅に関する技術と知識に秀でていた。また M での就労期間が短いのも流れの労働者の特徴である。

1950 年から 1960 年代中盤までは、経営者の家族が中心となって、工場の運営が行われていた。この当時、韓国から日本に「密航」した者や、日本人に比べて一般企業への就職の機会が大きく制限されていた在日朝鮮人にとって、蒸・水洗工場での労働は、一定した収入を確実に得られるという点で妥協のできる職業であった。この M への就業を紹介する朝鮮人同士の人間関係は、彼らが生きる上で大きな意味を持っていた。

京友禅産業界では 1960 年代後半から 1970 年代初頭にかけて、工場内で機械が積極的に導入された。結果、1970 年代の初頭に工場の労働者は徐々に減少した。同時期から、技術を持つ流れの労働者が M では重宝された。京友禅産業の不況が深刻化する 1973 年以降も繁忙期の労働力不足に対応するため、即戦力を持つ流れの労働者が雇用された。1980 年代後半からの京友禅産業の長い不況の中で、流れの労働者も雇用されなくなり、M は経営者の家族と就労期間が長い労働者によって運営された。

第 5 章では、約 40 年間、経営者の家族として、また労働者として就労してきた在日朝鮮人女性のライフヒストリーを通して、在日朝鮮人の労働を論じた。彼女の事例は経営者家族と結婚を契機に、京友禅産業の蒸・水洗工場で就労するようになった在日朝鮮人女性であった。1970 年に M に来た時、彼女は他の労働者の衣食住生活を助ける補助的な労働を家族労働者の一員として担っていた。

1970 年代中盤以降になると、M の経営は徐々に難しくなり、工場の労働者数を減らしながら対応した。そのため M では労働力の不安定な状況が起こり、女性の家族労働者が労働力として扱われた。本来は工場の経営者家族として労働者の生活を助ける要員であった彼女も、京友禅産業全体の不景気が深刻になると、工場の最前線で肉体労働に従事した。彼女が初めて工場 M を訪れたとき、そこには性別役割分業が存在していた。しかし京友禅産業全体の不景気により、彼女の労働は他の男性労働者と同じく、肉体労働を中心に行うようになった。

第 6 章では、在日朝鮮人が京都の繊維産業で労働する中で持った民族的アイデンティティを考察した。在日朝鮮人一世らの事例より、祖国建設のために故郷の経済や社会再建に尽力する者が存在すると同時に、西陣織産業での在日朝鮮人の組合や民族金融機関の創立を試みるなど、日本での生活基盤の獲得のために尽力するという活動も存在した。その一方、在日朝鮮人二世の女性は、西陣織産業で就労する中で自身が「日本人扱い」を受けたことに違和感を覚えた。この違和

感が、彼女が「在日朝鮮人二世」として民族的アイデンティティを探す出発点にもなっていた。

在日朝鮮人の持つ京都の繊維産業に対する意識について考察した。これら産業の中で彼らは自身の働くこの産業に対して各個人が多様な感情を持っていた。ある者はこの産業で働くことと獲得した経験に対し誇りを持ち、別の在日朝鮮人は「人間らしく生きる」ために、西陣織産業で必死に働いてきたと語る。そして共通的に明らかになるものとして、彼らが生きるために京都の繊維産業で必死に働いてきたという思いと、習得する技術への自負などの、労働者としてのアイデンティティであった。

京都の繊維産業に従事した在日朝鮮人の労働を見た場合、3 類型が存在した。第 1 の労働の類型として、繊維産業で労働者として就労した後、経営者として成功して、他産業へと転業するという事例である。第 2 の労働の類型は、ある時は労働者として京都の繊維産業で就労するが、ある時は経営者として工場を運営する事例である。この労働では、経営者と労働者の線引きが曖昧であった。最後、第 3 の類型は、継続して労働者として京都の繊維産業に就労し続けた者である。そうした者は経営者になるという考えも持たなかった。

西陣織産業と京友禅産業に置かれた在日朝鮮人の位相を論じた。西陣織産業では朝鮮人であっても能力と勤勉さがあれば参入することが可能であり、経営者として成功する者も存在し、朝鮮人と日本人とが競争する関係であった。また戦後、西陣織産業では朝鮮人を代表する同業者組合が誕生した。一方、京友禅産業の蒸・水洗工程においては、経営者を見ても労働者を見ても圧倒的多数が在日朝鮮人で、日本人はごく一部であり、業界で「日本人は京友禅工場、在日朝鮮人は蒸・水洗工場」というように、産業的な「棲みわけ」が見られた。そのため、京友禅産業では朝鮮人のみの組合は存在せず、蒸・水洗組合が一部で日本人経営者が存在するものの、朝鮮人の同業者組合として機能した。このように、同じ京都の繊維産業といえども、在日朝鮮人の位置や日本人との関係は、西陣織産業と京友禅産業とでは大きく異なった。